

世界へ「物、事、考え」を伝える 平明日本語について考える(Part-1)

名こそ惜しけれ:日本人の美学の核 ほか

目次

- (01) 僕はウナギだ:これは be 動詞?
- (02) 僕、食べたい、アイスクリーム:SVO
- (04) I have a Kirin.: 英語で注文
- (06) 汝をたたく、故に我あり:人間関係
- (07) トンネルを出たのは誰だ:「雪国」の英訳
- (11) 西出陽関無故人:日本語風に直して
- (38) 日本語と論理的表現:日本語の生い立ち
- (39) 日本語と論理的表現(2):問題意識が欠けている
- (45) 文明としての論理的表現:頭脳と勇気と思いやりが必要
- (49) 論理的表現と心理的な作用
- (50) 共生の哲学と論理的表現:両立するはず
- (66) 論理展開と提案:三つのケース
- (70) 論理的提案:悪しきもの良きもの
- (79) 名こそ惜しけれ:日本人の美学の核
- (79-補足) 日本人としてのアイデンティティを失うな
- (99) 八代海軍大将、あるいは明治期の仕様書
- (105) 明快文書、あるいはなぜ書けないか
- (118) 論理的文書、あるいは日本語の流れ
- (124) 日本語、あるいは5階建て
- (132) 動詞、あるいは真ん中と末尾
- (133) 欧米の文書、あるいは主張を通すために

(01)僕はウナギだ:これは be 動詞？

仲間数人と、ガヤガヤと会社の近くの居酒屋に昼飯を取りに行く。おネエさんに次々と注文の声飛び。 ” 僕は、ウナギだ” 、 ” 俺、カツ丼” 。

仲間の中に、日常会話には不自由しない程度に日本語ができる欧米人が交じっていたら、ビックリするだろう。「山田さんは人類だと思っていたのに、ウナギなんですか！」と。そりゃそうだ。「僕はウナギだ」を英語に直訳すると、「I am a eel.」となる。

「僕はウナギだ」が、「僕は（サブジェクト）ウナギを（オブジェクト）食べます（食べたい、選択します）（動詞）」というセンテンスが変形したものであることは、日本語を母語とする人であれば誰もがわかっていることである。その証拠に、何分か後には、間違いなく、山田さんの前に「うな丼」が運ばれてきた。おネエさんは山田さんが「ウナギ」であるとはみなさなかつたのである。

もっとも、山田さんが日和見主義で、いつも意見がはっきりしない、ウナギのように捕まえどころのない人であれば、「山田はウナギだ」と上司が評することにもなる。この場合には、「山田（サブジェクト）はウナギ（のようにヌルヌルととらえどころのない）人である」という意味であるから、山田さんの属性を定義したセンテンスとなる。

英語の「be」動詞は、基本中の基本の動詞であり、様々な役割を持つ。その第一が、サブジェクトの属性を定義する仕事となる。従って、上司の山田評を英語に直せば、次のようになるだろう。「Mr. Ymada is a difficult person who does not show in open what he wants. He looks like a eel.」

この第一の「be」動詞にあたる日本語は、「サブジェクトは何々である（です）」の「である」となるが、この使い方は誰も気にしていないので、場合によれば「僕はウナギだ」という表現も出てくることになる。（05. 9. 3. 篠原泰正）

(02) 僕、食べたい、アイスクリーム：SVO

どこで読んだのか忘れてしまったが、ある学者が、日本語でも、幼児期には、「僕、食べたい、アイスクリーム」というように、西欧言語と同じ「サブジェクト（S）－動詞（V）－オブジェクト（O）の順序で話す、と書いていた。そう言われれば、息子も小さいときにはそのようなしゃべり方をしていたような気がする。

成長するにつれて、この順序がなぜ「SOV」すなわち「僕はアイスクリームを食べたい」に変化するのだろうか。

私の拙（つたな）い文化観察によれば、この変化は、日本文化の最たる特徴である「自然と、他人様と共に生きていく」という共生の哲学に基づいている。日本文化の中で、幼児が「社会」を意識し始めると、自分の主張を露骨に表現することはどうもマズイと気がついてくる。そこで、「アイスクリームを食べたい」とそっと言うやり方に変えていくわけだ。「食べたい」という主張をセンテンスの終わりにそっと言うことで、主張を和らげられることを賢くも悟っていくのだろう。

西欧の言語、中でも、力関係の上で、それらを代表する英語のSVOの順序と日本語のSOVの順序が違っていることが、我々日本人が英語を学習する上で最大の障害となっている。順序が違うことは処理の手順が別ものになることを意味し、手順の違いは処理装置に多大の負荷を掛けることになるからである。

英語を扱う時には頭の中の処理装置の手順を切り替えればよいただけ、ともいえるのだが、実は心理的な抵抗感とその切り替えを妨げる。波風立てないようにそっと言う日本文化が身に染み付いているので、それが心理的抵抗となって現れてくる。幼児のように、あたりかまわず「僕、食べたい、アイスクリーム」と叫ぶことが恥ずかしいわけだ。*この「恥ずかしい」という日本文化については、いずれ語りたい。

一方で、西欧の人は、特に英語を母語とする人達は、「僕、食べたい、アイスクリーム」と叫んでくれないと、意味を理解できない。さらに、厄介なことに、「アイスクリームを食べたい」と、サブジェクトを抜いて語られると、ますますもって、この人は何を言わんとしているのか、まったく理解できないことになる。サブジェクトを抜いて語ることは、動詞を末尾に持つてくるのと同じく、

露骨に言わないための手段の一つであり、同時に、動詞を末尾に置くことで、サブジェクト抜き表現が成立しやすくなるという関係にある。

英語で自分の意思を表明したり、状況を説明したりするときには、日本文化の華である「他人様と共に穏やかに生きる」心性を一時脇に置いておき、幼児になったつもりで「僕、食べたい、アイスクリーム」叫ぶことが要求されることになる。

(05. 9. 3 篠原泰正)

(04)I have a Kirin.: 英語で注文

米国のレストランやバーで飲み物を注文するときは、「ウイスキー」とか「ビール」といった、一般名称では通じないことが多い。はっきりと、銘柄を指定することが、間違いなく飲みたいものを手に入れるコツと言える。

さらに言えば、小泉さん（*日本国首相）のように単語だけを言うのではなく、センテンスで注文することが望ましい。私は何を欲しているのか、明確に主張することで、ウェイターなりバーテンさんは確実に反応してくれる。そこで「I have a Kirin」となるわけだ。このとき、間違っても「僕はキリンだ」と言うてはいけない。日本語に直訳すると、「私はキリンを持つ」とは変な表現に感じるが、これは「I like to have a Kirin.」を縮めて言ったと解釈される。

「私はキリンを持つことを好む」、すなわち持ちたい＝飲みたいと主張していることになる。

あるいは、「I have」と言えば、「have」という動詞にはサブジェクトである私の強烈的な要求の意思が込められているので、それだけで通用するとも言える。

いずれにせよ、飲みたい酒を手に入れることは極めて重要な事項であるから、確実にそれを実現するためには、単純明快に、望むところを、しかも具体的に述べる必要がある。

英語を母語としている人は、一対一で対面すればそこでは互いの主張のぶつけ合いとなる、との理解の下で頭が働いているので、その路線に沿って述べてやらないと理解してくれないことになる。「ご注文は？」という問いかけが、「What can I serve (or help) you?」と来るわけだから、こちらも「俺はどうしたい」

と言わなければならない。

さらに、物事を具体的に述べる、あるいは定義を明確にすることが、述べる（話す、記述する）上での基本にあるから、「ビール」という一般名称で言われると、バーテンさんの頭の中のデータベースが混乱することになる。「ビール」と発音される酒の銘柄があったかなと自分のDBをグググと検索することになるのだろう。しかも「ビール」という発音はなかなか厄介で、伝わらないことが多い。

アメリカやイギリスの小説を読んでも、「スパイ某は車で立ち去った」とは書かず、「ホンダで立ち去った」という記述に出会う。ともかく、彼らは物事の定義（definition）にはうるさいから、そのつもりでこちらも対応しないと話は行き違いになる惧れが強い。

酒の注文は行き違ってもまだ損害は微小であるが、これがパテントや製品の仕様書（specifications）となると、行き違いがエライことになりかねない。仕様書においても、「I have a Kirin.」のごとく、誰が（サブジェクト）何を（具体的に）どうする」を明快に記述することが大事となる。

（05. 9. 5. 篠原泰正）

(06) 汝をたたく、故に我あり: 人間関係

アングロ・サクソン（Anglo-Saxon）という民族は、厄介な習性をもっており、他者をボコボコに叩きのめすことではじめて自己の存在を確認でき、安らかにベッドで眠れるようなのだ。例えば、米国では、悪名の高いディベート（debate）なる言い争い、あるいは競技が学校で奨励され、生徒や学生が鍛えられる。ここでは、黒と白の本質の違い、あるいはなぜ黒なのか、なぜ白なのかの理由を探り、理解しようとするのではなく、黒色に見えるが実は白色であると「論理的に」言いくるめることができたものが勝者となる。法廷を舞台にしたハリウッド映画を見ていると、まさに、検察側と弁護側の白黒言いくるめ合いである。

したがって、彼らは他者が存在しないと生きていけないようで、南洋の無人島で一人で暮らすロビンソン・クルーソー（Robinson Crusoe）の真似はとて無じゃ無いが無理だろう。他者をやっつけるためには、己は正しい、あんたは誤っている、と突っ張り続けることとなり、これが単純な形で出てくると、「僕ら

ゃんは善であり、サダムは悪である」ということになり、他人の家にまで押しかけてボコボコにしたり、「哀れな者よ、悔い改めよ」とお説教をしたりすることになる。このような人が隣の家に住んでいたら、うっとうしくて仕方が無いことになり、どうしても引越しを考えざるを得なくなる。

さらに、この習性から出てくるものとして、互いの関係の在りように極めて神経質であるという関係式がある。日本人は村という共同体の中で皆と一緒に暮らしていくために、互いの関係について無神経ではないが、例えば私が経験したアメリカの会社の中では、特に幹部クラスにおいては、互いの上下関係、力関係への気配りはただ事ではない。もちろん、日本人のように穏やかに生きていくために気配りしているのではなく、相手を隙あらばやっつける、あるいは相手を利用して自分の利益を図るためである。

この互いの関係式の確認に神経質であることが、科学や技術の世界で展開されると、Aという要素とBという要素の関係の厳密な追及となり、その関係を記述している研究論文や、あるいは設計仕様書、特許仕様書においては、明確な記述が当然のこととして要求される。アングロ・サクソンが母語としている English（一般的には English という）は、このような関係を厳密に規定し（specify）定義づけ（define）て記述するのに適した言語であると言える。文化が言語を生み、言語が文化を育てるわけだから、あたりまえの話だろう。

AとBの関係の記述が明確ではない仕様書や論文は、彼らにとって神経に障るドキュメントであり、何らかの場においては、それこそ待ってましたとばかりにボコボコに叩かれる運命が待っていることとなろう。

（05. 9. 7. 篠原泰正）

(07)トンネルを出たのは誰だ:「雪国」の英訳

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」。川端康成の名作「雪国」の出だしである。

関東に住んでいて、冬季に群馬県側から新潟県側に鉄道で旅行をした経験がある人には、この叙述に出会っただけで、光景が眼に浮かぶはずだ。からっ風が吹く晴天の群馬県から長い三国トンネルを出た途端に、窓の外は一面の銀世界である。車内から「ホウッ」というため息、あるいは歓声が湧くだろう。 沖

いずれにせよ、上掲の文章の前後に上記のポイントを付け加えれば、事実関係の記述は完全な物となるだろう。そうなると、小説と「仕様書」の境目は何だ、という疑問が出てくる。

サイデンステッカー博士は特許の仕様書 (Patent Specifications) も書いているのかしら。

(05. 9. 8. 篠原泰正)

(11) 西出陽関無故人: 日本語風に直して

渭城朝雨?軽塵
客舎青青柳色新
勸君更尽一杯酒
西出陽関無故人

誰もが高校の漢文の授業で一度はお目にかかっているはずの、有名な漢詩で、作者は盛唐の詩人兼画家の王維である。

この詩を日本の学校では以下のように読むように教えられる：

渭城 (いじょう) の朝雨 (ちょうう) 軽塵 (けいじん) を?し (うるおし)
客舎 (きゃくしゃ) 青青 (せいせい) 柳色 (りゅうしょく) 新たなり
君に勸む (すすむ) 更に尽くせ 一杯の酒
西のかた陽関を出ずれば 故人無からん。 *故人は中国語では友人の意味

この読み方は「読み下し、あるいは訓読」といわれており、漢文学者によれば、この読み方によって日本で漢詩が親しまれるようになったと自慢されている。要は、日本語の順序に並び替えたわけだから、誰にもスンナリと受け入れられる。つまり日本語でこの詩を鑑賞しているわけで、何十篇、何百編読もうと、中国語の学習には結びつかないし、中国でのオリジナルの感性を理解する道は開けない。

順序が異なる箇所は、この詩では「うるおす軽塵を」、「勧める君に」、「出る陽関を」、「無し故人」の4箇所となる。中国語は英語と同じようにVO、すなわち動詞（V）の次にオブジェクト（O）が置かれていることが分かる。

日本では、大昔から、海外の文明と文化を輸入するに当たって、産地そのままを持ち込むのではなく、日本風に味付けをして取り入れてきた。これにより、素早くその良きところを導入することができたし、日本の文化を本質から破壊することもなかった。すばらしいやり方であると言えるが、一面において、これによって輸入先のことを理解したつもりになり、その理解に基づく色眼鏡で世界を眺めて満足する危険を常に伴ってきた。

日本における英語教育も、基本はこの「漢文読み下し」方式であり、未だにそれが続いている。いくら勉強しても英語で書いたり話したりできないままである。

（05. 9. 12. 篠原泰正）

(38) 日本語と論理的表現: 日本語の生い立ち

日本語は論理的表現にむかない、という人もいる。

われわれが現在使っている日本語の、言語としての骨組みは4世紀ごろ中国から漢字と言葉（単語）が入ってきた時にはすでに固まっていたはずで、そうであれば、その圧倒的な文字（漢字）と豊富な言葉（単語）を伴って、言語の骨組みさえ中国語に成り代わっていたはずだ。当時、文明のレベルがあれほどまでに違っていれば、言語の根幹さえもその影響を受けたはずである。そうならなかったのは、原日本語がすでに一定レベルにまで達していたから、構造を変えることなく、文字と言葉（意味と発音）の輸入にとどまったと思われる。

それでは、原日本語はどのようにして生まれ、作り上げられてきたのかといえ、これはいまだに言語学の世界でも定説がないようで、つまりわからない。私の感じでは、東南アジアとその東の南太平洋あたりが、どうも親戚である。

アイウエオカキクケコ、と後ろに全部母音を入れる発音は、ハワイのポリネシア語がどう見てもお仲間であるし、一口にアジアといっても、日本人の感性に合うのは東南アジアの人々で、文字と言葉の輸入元の中国の人々ではない。

文化が言語を作り、言語が文化を育てるとみなすなら、日本人の感性と原日本語は、東南アジア風であり、ポリネシア風であり、そう見れば、これはどう見ても、論理的に厳密に物事や記述を展開する世界とはほど遠い。享乐的であり、そして情感に敏感で、それを表現するとなると、「叙情的」な語りであり記述となる。今はもうあまり流行らなくなっようだが、NHK風に言うところ”演歌は日本人の心のふるさと”であり、そこで歌われている詩（歌詞）の言葉はほとんど「やまと言葉」（原日本語）である。代わるべきやまと言葉がないときだけ、仕方なく漢語が挿入されているようにみえる。

そのように、日本語の土台は叙情的であるとして、その上に豊富な漢語（漢字を組み合わせて日本で内作した言葉を含めて）が利用できるのも、難しいことを表現する言葉（単語）に不足はない。しかもテニオハで何でもくっつける事ができるから、現在の日本語で論理的に表現できないはずはない。確かに、言語としては、純和風の一階の上に中国風の二階を建て増ししたので、話し言葉としては今に至るまで調和の取れたテンポ、リズム、発音を持ってないままになっている。これはもう言語の生い立ちから見ての宿命とみてあきらめざるを得ない。演歌の歌詞ができるだけ漢語を排除しているのも、歌としての全体の調子を守るためと見ればうなずける。漢語がボコボコ出てくるような歌は、とてもじゃないが酒飲んでカラオケで歌う気にはなれないだろう。

続きは次回に

(05. 10. 18. 篠原泰正)

(39)日本語と論理的表現(2):問題意識が欠けている

目の前に一つの製品、例えば複写機が置かれているとする。この製品を囲んでいる、アメリカ人（イギリス人）、ドイツ人、フランス人、日本人の技術者に対して、それぞれの母語で、この製品は何であるか、記述して説明せよとの課題が出されたとする。どこの国の技術者が一番かはわからないが、間違いなく言えるのは、日本人技術者のレポートが最もお粗末という結果になる。

なぜだろうか。一言で言えば、日本の技術者は、文章で論理的に事実を説明す

る訓練を受けていないからである。学校においても、会社に入ってから、論理的に正確に、明快に記述する訓練は行なわれていない。そもそも、そのような先生が居るのかも怪しい。学校から企業研修まで、教育という面において、論理的に記述することの重要性は、課題として認識されていないと思われる。

日本人の特性として、図形で表現することには長けているから、先の課題に対しても、構造図のスケッチを添付せよと言われれば、間違いなく日本人技術者のそれが最優秀であろう。私が直接接してきた限りでは、欧米の技術者、また技術に限らず企業のエリートは、事実の報告や企画提案において、グラフィックで説明することは苦手であり、その代わりにテキスト（文章）で、とどまることを知らぬげに、猛烈に書いてくる。日本人がグラフィック人間であるとするなら、彼ら欧米人はテキスト人間と言えよう。

したがって、日本人が論理的表現が苦手であると、とりあえず断定すれば、その原因の一番として、欧米人と比べると、適性という面で劣るとなる。つまり得意ではない。

二番目に、言語としての成熟度が上げられるだろう。例えば、少年時代から私の愛読書（当時はもちろん翻訳で）であったコナン・ドイル（Sir Arthur Conan Doyle）のシャーロック・ホームズ（Sherlock Holmes）物を読むと、驚くほどに現代の小説とその文章記述が変わらない。これらの作品は19世紀の最後の四半世紀に書かれたのだが（最初の作品である「緋色の研究 A Study in Scarlet」 was first published in 1887）、データではなく感覚的にはその90%から95%は現代の文章と同じといえるのではないか。

すなわち、私程度の英語力でも読みこなすのに苦労はあまりない。一方、同時代の、明治期の二葉亭四迷の「浮雲」や幸田露伴の「五重の塔」などを読むのはそうとうにきつい。どのように日本語で近代文学を表現するか、明治の先駆者が限りない努力を続けていた最中の作品であるから、表現方法も手探りということで現代の人間が読むのにいささか苦労であっても仕方がない。成熟度という面では、英語と日本語は19世紀末においてこれだけの差があった。

三番目には、論理的に表現する必要性に対する認識の薄さと、その結果として出てくる、表現方法の錬度を高める努力の欠如が上げられるだろう。明治・大正期に、西欧近代社会に追いつくために、必死に日本語改革に取り組んできた先駆者の意図と努力は、昭和期に入って忘れ去られ、戦後も怠ったまま来てい

る。すでに80年間もの間、世界に通用する、すなわち簡単に英語なりその他の外国語に転換できる、つまり同じ土俵の上で展開されうる日本語を作り上げる必要性は意識されなかった。これは、もちろん日常の日本語についてではなく、また日本文化に密着した日本語の話ではなく、技術とか、社会システム、すなわち文化と切り離して（もちろん完全に切り離すことは言語であるからには不可能であるが）世界の人々に説明するために必要な日本語の話である。

先の戦争で負けた悔しさもあって、製品の生産方法や品質では日本は世界の頂点に立つことができたが、そのことを説明するために必要な「言語」については、誰もカイゼン（改善）に取り組んでこなかった。そのため、言語標準がない。論理的に記述するにはどのように書くべきかの標準仕様書が存在しない。したがって、その必要性を認識している人が、個々に、バラバラに手探りで取り組んできただけである。

なぜか。四番目に、われわれ日本人は、言語に無神経、あるいはその重要性を認識する知性に欠けている、ということが上げられるだろう。これは、島国で、日常的に多言語に接しなければならぬ環境にはないことが、その無神経さの要因となろう。前の戦争中に、英語は敵性語であるから使用禁止とした精神の幼稚さは、歴史における笑い話としてフェイルすれば済む話ではない。同じ精神構造は、あるいはそのレベルは、現在にまで引き継がれている。

日本の外に一步出ると、誰も理解できない不明瞭な日本語で、発明から製品まで、生産方法から社会システムまで、記述しているがために、日本国家として、企業として、さらには個人として、われわれは莫大な損失をしてきている。優秀な製品の輸出で稼いだお金の何パーセントかは言語不備のために失っている。意識もされていないから、統計に表れる事はないが、有形無形での損失は極めて大きいと、私は「感じて」いる。

話が長くなったのでここでやめるが、日本語で論理的に表現する方法を確立していくことは、いまや待ったなしの緊急課題であるし、そのことは、土台としての日本語の完成度から見て、それほど大変な作業ではないはずだ。要は、論理的表現をするための「仕様書」を作り上げていけばよい話と言えるだろう。

（05.10.19 篠原泰正）

(45)文明としての論理的表現:頭脳と勇気と思いやりが必要

発明の説明において、または製品の説明において、あるいは社会システムの説明において、なぜ「論理的」に記述しなければならないのか。一言で言えば、世界のどこにいる人であれ、記述された主題に興味をもってもらった人には、記述されていることを明確に理解してもらわなければならないからである。頭で理解する能力と意欲を持つ人に、その人が属する宗教と民族と文化に関係なく、伝えることができる考え方、技術、システム、生産方法、等々を「文明」と称するなら、論理的記述は、その文明を支え、そしてその文明を伝えるための、多分唯一的な手段といえる。

文明を伝える方法は、いかに映像の時代となろうとも、その基本は言語にあり、言語による表現能力が乏しければ、いかにその方法や製品やシステムが優れていても、相手にうまく伝わらないことになる。言語の基礎はそこでの文化に根ざしているが、文明を伝えるために使われる言語は、できるだけ「文化」の色合いを消したものである必要がある。文化の臭いが強ければ、その文化を共有していない人にとって、理解することが極めて難しいことになるからである。どうすればよいか。答えは簡単である。論理的表現は、もちろん表現する人が属している文化の尻尾は引きずっているにせよ、世界共通であり、受け取り手が一定の能力を持っていたら、正しくその表現内容は伝わることとなろう。

この時、母語と外国語という障壁は、大きなものではない。なぜなら、例えば論理的に明確に、明快に記述されている日本語文章であれば、それを正確に英語に転換する能力を持った人材はたくさんいる。この場合、コンピュータプログラムで実行されるいわゆる機械翻訳も、有効に活用できることとなろう。なぜなら、機械翻訳の成否のかぎは、入力される日本語文章の論理的明確さにかかっているからである。プログラム自体は極めて高い完成度を示しているのだから、問題は元の日本語文章を書く人間サイドにあることは明らかである。

日本社会全体に渡って、大学の先生から新聞記者に至るまで、大きな誤解がある。日本語は日本人だけのものであると。なるほど、「源氏物語」と「奥の細道」の世界は、日本人だけのものであっても一向に構わないし、その価値が減るわけでもない。しかし、日本語はそこだけにとどまるものではない。「文明」を発信するための媒体としての役目もある。社会全体でこのことを認識しないまま来ているのが、今の日本であろう。

論理的に明確に述べることは、述べたことに対して責任を持つ覚悟がある。AとBの関係を明確に記述することによって、周りから非難を受ける場合もあることを覚悟しておくことも必要だろう。また、他の人に理解してもらいたいという気配りが不可欠である。世の中には様々な人がいるのだという認識も持っていなければならない。すなわち、論理的に明確に記述するということは、単に頭脳のレベルではなく、それよりも何倍も、書く人の、勇気、そして他者へのやさしさが必要なのだ。

自分の行為に責任をとるつもりがない人、他者へのやさしさがいない人、他者に何かを伝えたいという情熱のない人、こういう人には「論理的文章」は書けないし、また書くつもりも持たないだろう。「論理的に明確な日本語を書けるようにしよう」という掛け声が、文部科学省を頂点に持つ教育界から少しも聞こえてこないのは、このような事情による。自分たちが実行するつもりがさらさらしないことを大きな声で推進する人はいないだろう。

このようにして、日本で日本語が問題になるとき、それは敬語の乱れであり、カタカナ外来語を中国からの外来語（漢語）に置き換えようという漫画チックな動きであり、漢字が書けない読めない、といった世界の中から出ることはない。勇気をもって、責任とる覚悟で、論理的に日本語で表現できるようにならねばならない、ということを、論理的に明確に主張する人は、いるとすればちまた（巷）の寺子屋の先生だけだろう。

（05．10．27）

(49) 論理的表現と心理的な作用

日本人が、なぜ、論理的に明快に表現することを苦手としているのか、あるいはその重要性を認めて、教育の場でなぜキチンと教えないのか、について、心理面からもう一度確認をしておくことにする。

(1) 責任を逃れるために

論理的に明快に表現しないことで、そのテーマから発生する結果に関しての、責任を逃れようとする心理が働いている。ここには、心理だけでなく、責任が降りかからないように、意図的に明快に書かないという頭の良い確信犯もいる。いずれにせよ、明快に表現することを避ける奴は、世界の中では「卑怯者」と扱われるし、また「名こそ惜しけれ」という世界に誇れる精神の「美学」を、

鎌倉時代以降一千年に渡って維持してきた日本人の、風上には置けない存在である。

(2) 村の中で平穩に過ごすために
はっきり言うと角が立つ、と思い込んで、あるいは実際の生活の知恵で、曖昧に表現することが身に染み込んでしまっている。この癖のまま世界の中に入っていくと、「卑怯者」というレッテルにプラスして、物事を筋道立てて理解できない、表現できない「頭が弱い人」というレッテルも頂戴することになる。

(3) おのれが権威を示すために
庶民、平民、無学の者と違って、俺は高等な技能と頭脳を持った専門職、エリートであることを示す方法として、わざわざ難解な文章を書く。一昔前までは官公庁にこの手の人間が多かったが、さすがに今ははやらなくなった。しかしまだ特許弁理士先生などにはこの手の人がいるようだ。わざと分かりにくく書いているようだが、実際は、頭が明晰でないから分かりやすく書けない人が多いのではなかろうか。

(4) 世界中が日本とと思っている幸せなイナカッペ
海の向こうには色々な人がいるという事実を知らず、自分の流儀が世界の流儀と思い込んでいる幸せな人がまだ生存している。明治生まれで40年前になくなった私の祖母は、神戸の周り、広くとも関西地区から一步も出たことのない人だったので、昭和二十五年、初めて東京に来たとき、「なんでこのお人は変な言葉をしゃべってはるのかしら」と驚いていた。

(05. 11. 05. 篠原泰正)

(50) 共生の哲学と論理的表現: 両立するはず

アングロ・サクソン系の人々の、俺が俺がという態度、何でも黒か白かの二値で把握する単純性、他人と自然を自分に対立する無機質の対象物と眺めるものの観方には、いささか、あるいは相当にへきえき(辟易)するが、それらのことが、物事を論理的に表現する上ではプラスに働いていることも間違いのないところだろう。

一方、私を含めて日本人は、他人様と自然と、共に生きていくのだという共生の哲学を基本に持っており、その哲学は、地球がここまで来てしまった今、世

界が必要としている基本原理となるべきものなのだが、物事、特にその互いの関係を明確に規定していく論理的表現には適さないということも事実だろう。

しかしながら、苦手だ、不得手だとばかりは言っていられない。心理的には重たいものがあるだろうが、明快に言い切らないと世界の中では生きていけないし、また世界のリード役も務まらない。

地球という自然と、世界の人々と、共に生きていくには、自分の責任、相手の責任、自分がなすべきこと、相手がなすべきことを明快に述べた上で共闘していくことが必要である。曖昧な湿度の多い関係ではなく、乾いた関係を築いて行くことが必要となろう。心の根底において、相手を、すなわち人様や自然を尊重する「礼儀」を持っていれば、論理的にズバリと物事を言い切っても争いにはならないはずだ。一般的に、あるいは非科学的に述べるが、アングロ・サクソンが世界から嫌われるのは、彼らが論理的に物事を述べ、主張するからではなく、他の人々の尊厳に無神経であるからであり、自然を自分達人間に利するものとしか見ない、あるいはみなせない考え方にその原因がある。

人間の品質が高度であることの証でもある「礼節」を忘れなければ、共に生きていくという理念と論理的に明快に述べることは両立するはずである。

(05. 11. 05. 篠原泰正)

(66)論理展開と提案:三つのケース

他人様（ひとさま）に、あることをしてもらいたい、したらどうでしょうと提案する場合に、幾つかのパターンがある。

先ず第一に、まともな哲学（理念）の下に、合理性を持った論理の展開でもって提案するケースがある。受け手がまともであれば、この場合は、両者が知恵を出し合い、よりよい実施策が生まれ、実行されるだろう。一方、受け手に哲学もなく、提案された論理の展開を理解する頭脳もなく、改善しようという勇気も意欲も無い場合は、いかにまともな理念の下に整然と論理的に展開された提案であっても、暖簾に腕押し、馬の耳に念仏となってしまうだろう。

第二のケースとしては、よからぬ理念の下に、論理だけは整然と提案されてくる場合が考えられる。この場合、受け手には、墨染めの衣の下に着込まれた鎧

(よろい)を見極める力量が必要となる。それを見極めたうえで、毅然として提案された論理展開を拒絶する勇気、気概、信念が必要になる。この場合、拠って立つ基盤は、対応する人が持っている、人間としてこう在らねばならないという、ゆるぎない原理原則となる。それなしに、ただ論理に対して論理だけで抵抗するのは、極めて危険な方策となろう。特に、論理展開において、欧米よりも、そして多分中国よりも力が劣る日本人としては、原理原則が揺るぐと、総崩れになる惧れがある。

第三のケースは、怪しげな理念の下に、怪しげな論理の展開でもって、提案を強制してくることが想定できる。この場合は、提案はまったくむちゃくちゃ、無道なものであり、たいていの場合、提案元は、ホルスターに入れた拳銃に手を掛けた状態で強談判をしてくる。沖には砲塔をこちらに向けた黒船がずらりと並び、いうことを聞かなければ、これ以上銭は貸さないぞ、石油は止めるぞ、あんたの海外資産は没収するぞ、等々あらゆる脅しが後ろに控えていることになる。今の世の中ではこのケースは余程特殊だから、これ以上の考察は今のところ置いておく。

問題は、第二のケースである。ここでの対応は、哲学と知力と胆力が必要であり、不幸なことに、その全てに欠ける資質の者が、当事者として対応すると、とんでもない結果となってしまふ。さらにまずいことに、衣の下の鎧を見なければ、見た目は論理的な提案であるので、それに追随するインテリ太鼓もち、幫間がそこら中に出てくるのが一般的であることだ。さらには、その提案に悪乗りして、自分も甘い汁を吸おうとする「哲学」が無い人間もゾロゾロと出てくることになる。

これから暫く、時折になるだろうが、この第二ケースの論理展開の事例を取り上げ、その中身を検討していくことにする。

(05. 12. 17. 篠原泰正)

(70)論理的提案:悪しきもの良きもの

現状分析の結果、そこに問題点が抽出されれば、次にその「改善」策を考えなければならぬ。その改善策が、商品企画においては新規の商品企画提案として出され、製品開発では、既存の技術要素の組合せだけでは改善が見込めなければ、新規に「発明」をする必要がでるだろう。

ことが、怪しげな理念やコンセプトの下での展開であっても、例えば、金を転がしてさらに大儲けをはかる、というような目的の下であっても、現状を分析し、つけ入る隙を見つけ（問題点の明確化）、自分達の利益のためにいかにひとを説得するか（騙すか）の策を考え、それを「現状改善策」として論理的に記述して提案することになる。狙いの品性が高かろうと低かろうと、取るべきプロセスは同じであり、必要な能力と気力も同じ程度に必要である。あるいは、人を騙すためには、より高い知能（知性ではない！）レベルが必要かもしれぬ。

先の大戦の期間中での、原子爆弾の開発（マンハッタンプロジェクト）において、集められた世界最先端の頭脳を前にして掲げられた「大義」は、ナチスドイツが原爆を開発しており、それに対抗できるものをわれわれが持っていなければ、エライことになる。世界中がファシズムの力の前に屈することになるかも知れぬ、というものであった。

そりゃたいへんだということで、超特急の突貫工事で原子爆弾が開発された。集められるだけ集めたその時点までの技術の上に、超えなければならない敷居（スレッシュホールド threshold）を克服し、悪魔の兵器は完成した。実はその開発途上において、連合軍のインテリジェンスは、ナチスドイツは「atomic bombを開発」していないという情報を得たが、その事実は開発完了まで、技術者には伝えられなかった。

「民主主義」諸国のリーダーがその最新情報を隠したのは、改善策の開発に取り組む開発者の「開発意義喪失」による開発意欲の低下、そしてその結果としての開発速度の低下を恐れたわけだ。論理的に研究開発者を騙したことになる。

話があらぬ方向にそれたようだが、ここでの結論は、整然とした論理展開の下で提案あるいは提示される「改善策」には、人間にとって良きものも、悪しきものもあるということだ。それを見極めるのは、前回述べた「分析力」であり、その分析力は能力もさることながら、何よりも、事実をつかむという知的作業に依存している。

（05. 12. 18. 篠原泰正）

(79)名こそ惜しけれ:日本人の美学の核

若いころ、ヨーロッパで、宗教とはいったい何なのかを考えさせられた。

お前は日本人だから仏教徒かとの質問に、仏教の教えに接したこともない存在としては、「ノー」と答えざるをえない。しからば無神論者なのか、と聞かれると、そもそも神の存在など気にもしたことがないので、神がいるとかいないとかの話には答えようもない。ここらで問いかけてくる相手も私という存在をどのような範疇に当てはめていいのかわからなくなるし、こちらも、神がいようがいまいがどうでもいいではないか、なぜそのような「些細」なことにこだわるのか、とこれまた西欧人の考えに理解が及ばない。

キリスト教を信じる彼らにとって、信じる宗教を持たない人間は野蛮人であるか、あるいは得体の知れない存在とみなすということは、既にいくつもの書物で承知はしていたが、自分はなぜそうなのか、宗教なしでも別に何の支障もないことを適確に表現することはできなかつたし、彼らがなぜ宗教なしの人間を理解する基礎を持っていないのか、理解できなかつた。

後になって、司馬遼太郎さんの本を読むことで、問題のひとつは解決した。

司馬さんがどのように記述されていたか、確かではないが、宗教は獰猛な人間を飼いならすために必要とされるという言葉に出会って、霧が晴れた。彼らには宗教が必要であり、自分たちが必要としているから、相手も必要としているに違いないとする。だから宗教を持たない存在は、自分たちが宗教を持たなかつた時の状態と同じく「野蛮」であり、だからこの「福音」を伝授したいという、お節介になるわけだ。

ところが、日本人は、宗教なしでも別に獰猛でもなく、野蛮でもなく、近代文明も受け入れているし、知識教養も高く、礼儀も正しい。いったいどうなっているのだ、ということになる。

ここまで書いてきたようにこの疑問に当時は、私は答えられなかつたのだが、今ならできる。

われわれ日本人は、人間存在の基盤に、「名こそ惜しけれ」という美学を持っているからこそ、キリスト教を信じる西欧人や、そのほかユダヤ教、イスラム

教、ヒンズー教等を信ずるどのような人々に対しても、同じ土俵で毅然と相対（あいたい）することができるのだ。

「名こそ惜しけれ」とは、いうまでもなく坂東武者の中に育った「美学」であり、生きるうえでの基本基準とでもいうべきものである。もちろん宗教ではなく、また哲学という概念にもあわない。この概念を定義するのは難しいので、私はこれを「美学」と呼んでいる。生きるうえでの、美意識に関する感性に基づく、基本的な姿勢とでもいっておく。

鎌倉時代から、現日本の原型は形作られたのだから、その社会におけるエリート層の武士の美学は次第に日本人全体のものとなっていく。名こそ惜しけれ、自分の行うことには自分が責任を持つ、ということである。恥ずかしい仕事はできないということである。自分の名にかけて、物事はキチンとやるという自意識を高く持った誇り高い存在を支えている美意識なのだ。

農民が作る農産物、職人が作る制作品、これらを見れば、日本人は庶民の隅々までこの「名こそ惜しけれ」の美学を持っていたことがわかる。日系移民という、高等教育を受けたわけでもなく、熱烈な仏教徒でもない普通の民衆が海外の地であれほどの評価を得たのも、この美学が根底にあったからに違いないと私は確信している。

この美学は、戦後、高い品質の工業製品を生み出す原動力にもなった。工場の現場の一人一人が無意識であってもこの美学を持っていたがために、自分が関係した製品は、恥ずかしくないものを市場に出すのだという信念があった。今もあるはずだ。

今なら、私は、外国の人々に説明できる。俺たちには「名こそ惜しけれ」の美学があるから、宗教はなくとも、まともな行動が取れ、まともな社会を営むことができるのだと。

ただし、外国語で、このことを説明するのは相当に難しい。あれやこれやの実例を示しながら説明していかないと、理解を得るのは大変な作業となるだろう。

ともあれ、われわれ日本人がこの「名こそ惜しけれ」を忘れない限り、というより、まだ維持している人々が先頭に立って行動すれば、21世紀のこれからの困難な局面において、世界のパスファインダー（pathfinders）として尊敬を

受け、世界の存続に貢献できることになるだろう。

論理の展開の根底にはまともな哲学、人間とは何、どうあらねばならないかの原理原則がなければならず、幸いなことにわれわれはその原理を「名こそ惜しけれ」という一言で表現されるもので持っている。(06. 1. 1. 篠原泰正)

(79-補足)日本人としてのアイデンティティを失うな

「名こそ惜しけれ」日本の美学の核

2006年1月1日にアップした篠原ブログ：「名こそ惜しけれ」日本の美学の核が、2月13日から急激にアクセス数が増え、10000を超えた日もあり、10年前に書かれたものが、なんで今頃？と驚いています。

この「名こそ惜しけれ」日本の美学の核、は下記の「日本人としてのアイデンティティを失うな」という原稿の続きになっています。導入部も読んでいただくと、更に納得頂けると思います、その原稿をアップしました。「知的財産活用研究所」が提唱し続けている「グローバル特許明細書」を作るには、論理力が必要ですが、その論理思考の危うさと日本人が持つ美意識を再認識することが目的で書かれています。

日本人としてのアイデンティティを失うな

「世界の共通分野での「物・事・考え」を伝えようとするなら、論理的に筋道つけて説明しないと、理解を得られない。即ち、特許明細書の書き手は論理思考を持たねば「グローバル特許明細書」の作成は難しいということを強く訴えてきたつもりである。

誤解されると困るが、論理性と「人間としての正しさ」は必ずしもイコールではない。論理的にものごとを考え、表現する根元の所に、「人間としての正しい心」がなければ、論理的に怪しげなシステムを考え出し、論理的にとんでもない戦略を立案し、論理的に嘘をつく行いが横行することになる。論理的思考と表現能力を身につけることは、人間としての品質が向上することを意味しない。

しかし世界の中で、それなりの役割を果たすためには、「面倒だけれど」論理性を身につける必要があるということは理解して頂きたい。つまり日本人としての「アイデンティティ」を失ってはいけないことを理解してほしいということである。

皆さん既に承知しているが、英語は対立の図式で表せる文化の下にある言語である。従って英語で事実報告や考え方や分析された情報を受け取る（主に読む）、英語で表現する、英語で討議するという場合には、英語力が高くなればなるほど、英語を母国語とする人の、この対立の図式の基で、思考や分析、議論を行うことにつながる。

これは、日本人としての「アイデンティティ」や、企業や国という団体の利益保持という面からは、極めて望ましくない危険なことである。実際のところ、英語およびその背景の文化にあるこの対立の図式が、今日の世界における様々な摩擦の原因の一つになっていると言える。

グローバルな環境で、英語で戦う戦士たちが、深い経験を積み、日本人であることを忘れなければ、そこから初めて、我々の、日本式の生き方を、英語を使って表現していく場面が見られるようになって考えている。そのように期待をしている。日本人としての「アイデンティティ」は見失うな、まず日本語を身につけろ、そして英語の力は数段伸ばせ、と相反することを要求することになるが、それは日本人として克服しなければならぬ大切な事項と考えている。（発明くん 2016/03/01）

(99)八代海軍大将、あるいは明治期の仕様書

司馬遼太郎さんの「ある運命について」（中公文庫）を読み直ししていて、以前は読み飛ばしていた箇所が目がとまった。

「文学としての登場」と題するエッセイの中で、明治期の八代海軍大将の書簡について書かれている。

明治23年、「かれがウラジオストックに語学留学していたとき、同地のロシア式暖炉（ペーチカ）に感心し、その構造を広島の知人に書き送っている。」

「八代は明治初年に築地の海軍兵学校に入った。ここで機械を学び、海洋とか気象といったことにちなむ自然科学を学んだ。このことが、同時代の知識人の文学的認識癖からかれを離れさせ、ものごとを写実的にとらえる能力をもたせるにいたっている。」

「かれはたかが五尺ばかりの暖炉の構造をのべるにあたって、その前に、広大なシベリアを説き、ややちじめて斜面の多いウラジオストックの地形をのべるのである。この地での多くの家屋の基礎は、斜面を平にすることなく、ななめのまま据えられている、とし、ついで家屋構造におよぶ。その叙述の措辞、表現が当をえていて建築家がこれをよめばそれだけでロシア風民家が建てられそうにさえ思えるほどである。八代は文章表現の上での家屋を建ておえてから、ようやく暖炉の位置、構造にいたる。」

これはまさにペーチカの仕様書そのものではないか。
シベリア、ウラジオストック、家屋、と全体を描いてから直接の対象である暖炉の記述がなされる。現代の欧米の仕様書の書き方と同じである。

「散文の持つ一つの機能が、ここではほぼ完全に果たされており、このように、地理学的、もしくは土木建築的な対象をつかみとって読み手に正確につたえる散文は、江戸期においては不完全にしか存在しなかった。それを十分に表現しうる文章が、明治二十年代初期において一海軍軍人の私信のなかで成立しているということに、われわれはおどろかざるをえない。」

明治23年（1890年）、今から110年以上前に、司馬さんが驚くほどの正確な状況レポートを日本語で書ける人もいたわけだ。本人の資質だけでなく、自然科学系の学問とロシア語を学んだことが、このような成果を生むことにおおきな力となったことは容易に想像できる。当事の兵学校の勉強はほとんどが英語の教科書でなされたであろうから、八代大将の頭の中には自然に、論理的な組み立てが入っていったのだろう。

しかし、驚きは、思考の展開だけでなく、それを「日本語文章」で表現できているというところにある。*現物をよんでいないので、司馬さんの受け売りだが、間違いはないだろう。

100年以上前に、八代大将がきわめてまれなケースであったにせよ、現代の仕様書の展開様式と同じ流れで、しかも正確に記述されていたのなら、われわれはこの100年間何をしていたのだろう。進化論風にみれば、退化しているのではないか。まともな「仕様書」が書ける人がどんどん減っている、という観察が正しいとすれば、100年前の八代さんのレベルをわれわれは越えていないことになる。

「建築家がこれを読めばそれだけでロシア風民家が建てられそう」とは、まさに仕様書の文章の極意であり、仕様書においては、図面の援用無しに、文章だけでどれだけ読み手の理解が得られるかが、勝負どころである。

100年以上前に八代さんが書くことができたのだから、われわれが日本語で明確に、論理的に、「仕様書」を記述できないわけがない。それができていなければ、それはひたすら、われわれの怠慢、勉強不足ということになるだろう。
(06. 1. 30. 篠原泰正)

(105) 明快文書、あるいはなぜ書けないか

われわれ日本人はなぜ明快な文書を書けないのだろうか。

考察を更に深めるために、その理由を、思いつくままに列記しておく。これ以降において、まちがっているのは消し、追加すべきは加えていくことにする。

なぜ明快な文書を書けないのか：

(1) 露骨にものを言う事をはばかりる心情が働く；
これは日本文化の根っこにある、狭い村の中で仲良く生きていくための生活の知恵に根ざしていることだから、その心情そのものを槍玉に挙げることはできない。この心情をもったまま、明確に言うべきときには言う理性と勇気を持つべきであろう。

(2) 道具としての日本語が論理的に明快に表現する言語として適していない；
英語と比べるとこのように言うこともできると思うが、問題は、適応できるように言語を改善してこなかったことにある。日本語で論理的に書くことは可能である。

(3) 文書を重視する文化がない；

日本でも、多くの古文書が残されている事をみれば、まったく文書の価値を無視しているわけではないことが了解できるが、例えば欧米社会における文書重視の徹底と比べると、日本は「未開」の国である。

(4) 他者を説得する気迫に欠ける；

(1) に挙げたことに関連するが、俺が俺が、とでしゃばると叩かれる社会だから、文書でもってなんとしても他者を説得するのだという迫力に欠ける。その気迫がないから、分かりやすくするために念入りに推敲（すいこう）を重ねる努力もしない。

(5) 人を説得するにはどの様に文書を構成すればよいのか、誰も教えてくれない；

文書をどの様に展開すべきか、中学から大学まで、ひとつもカリキュラムがない。つまり、教育課程では、誰も指導を受けていないし、教える人もいないし、標準もない。大学を運営している人たちの頭の中には、このことの重要性を理解している人がいないのだろう。理解していれば対策を考え、教える講座を設けるだろう。なお、問題を認識していて、しかるべき位置にしながら対策を打たない人はその職から外れたほうがよい。

(6) 責任を取りたくない；

文書で明確に明快に記述することは、その言ったことに責任を取る覚悟がいる。この責任を取りたくない人は、つまり卑怯な人は、明快に書かない。勇気の無い人も明快に書かない。

(7) 難しく書くことが「えらい」と思っているバカもいる；

自分は国の官僚だ、大学の教授だ、専門のXX士だ、と中身ではなく「肩書き」の権威だけに頼って生きている、つまり本来能力のない人は、わざと難しく書いて権威を保とうとする。

(8) 分かりやすく書ける頭がない；

論文やレポートを権威付けのためにわざと難しく書くことは、相当の知性と能力が必要で、一般的に、分かりにくく（難）い文書は、書いた人の頭の中が明晰でないとと思われる。

(9) 文化、生活レベルで使われる言語と論理的に表現するための言語が頭の中で整理分類されていない；

言語に対して無神経、あるいは勉強不足であると、文化的言語と論理的言語の使い分けができない。

(10) 国の機関が論理的表現のための日本語に対してまったく何も理解していない；

日本語が国のレベルで、例えば国語審議会などで、論議される場合、その論議の対象は、文化生活的、情緒的、叙情的日本語であり、世界に発信するための「論理的日本語」がどうあるべきか、ということは、戦後60年の間、一度も論議、審議されたことが無いようである。なぜならそれが必要だという問題意識を誰ももっていないから。あるいは持っている人を審議会のメンバーに入れないから。

(11) 外国語と比較できない；

自分が何気なく住んでいる国を見直すには、一度外国で生活するのが手取り早いように、普段何気なく使っている母語（日本語）を見直すには、何か一つ外国語を学ぶのが有効である。日本では中学から英語教育がなされているが、残念ながら、ほとんどの人が、母語と英語を比較して言語とは何かを考えられるレベルには達していない。つまり、日本語を改善する手がかりが外国語からは得られていない状態にある。

(12) 他者への理解が少ない；

自国以外の他の文化や社会のありようについての理解が不足していると、異なる人に理解してもらうには、どの様に表現すべきか、と悩むこともない。悩まないから改善する必要性も感じない。この面では、日本人のほとんどは島国の田舎人である。先進国の中のイナカッペということでは、世界の中では、アメリカ人と双璧をなしている。

(13) 論理的に考える訓練を受けていない；

教育課程において、また企業に入ってから、論理的思考を鍛える訓練は、ほとんど受けてきていないのが一般的な姿であろう。

(14) 論理的なものごとを進める人は嫌われる；

日本の村の中では、仕事を全て、論理的に押し進める人は嫌われる。同じことだが、論理的に明快に書いた文書はその村の中では「嫌われる」。

ここまで書いて疲れたのでやめる。

(06. 2. 6. 篠原泰正)

(118) 論理的文書、あるいは日本語の流れ

一つの文書を論理的に構成し、論理的に流していくには、三箇所での注意をする必要が有る。まず、文書全体の構成において、その文書で述べるサブジェクト・マター (subject matter) が大きな全体の中でどの様な位置に在るかを明らかにし、述べる事項の概要を示し、そして具体的な詳細説明に移る構成をとる。

二番目に、それぞれのモジュール (パート、部分、パラグラフ、節) において、重要事項から枝葉へ、抽象的・一般的から具体的説明へと流していく。

三番目に、一つ一つの文章において、同じく重要事項から枝葉へ、抽象・一般から具体へと記述していく。

と、記したが、三番目の流が実現できるのは英語など欧州言語を用いた場合であり、日本語を用いると、話はそうはいかない。日本語の文章は、枝葉末節の事項の説明のあとから幹の記述になるのが、言語として自然な流れであるからである。

このところに、日本語で論理的に文書を展開する上での障害がある。

一番と二番は、理性によって、欧米の文書と同じ構成と流れとすることができる。グローバル・スタンダードとは言いたくないが、そのように構成するのが、これまで世界をリードしてきた欧米流のやり方であり、また、文化を異にする人々の間で、理性で互に理解しあうためには、この流れ方が、少なくとも今現在では、最も確かなやり方といえる。

ところが、日本語で文章を構成しようとする時、途端にその流を逆にせざるをえない。全体を構成する論理的リズムの上では文章を記述できない。リズムが壊れることは、記述していく上で、心に大きな負担となる。大から小へ、主から従へ、一般から具体へと文書を構成しているのに、そのコンテンツである文章の記述の順序がそれとは逆になっている。

僕ら日本人が論理的文書をつくることを苦手としている一つの原因に、この全体構成の流と個々の文章の流れの相反があるのだろう。僕らは論理的文書を、リズムに乗ってすいすいと書いていくわけには、なかなか行かないのだ。

とはいえ、これは、苦手だからと放置しておいてかまわないぐらいの小さな課題ではない。それどころか、これからの世界で生きていくためには、また世界をリードする役目を担っていくためには、論理的な文書を作成するという課題は、逃げることのできない、途方もなく大きな課題なのだ。

黙って、高性能、多機能、小型軽量、高品質の製品を作っているだけで事が済んだ昔が懐かしい。

(06. 3. 3. 篠原泰正)

(124) 日本語、あるいは5階建て

日本語は3階建ての構造になっており、更にその上に「論理的表現」という4番目の階を建て増ししなければならない、という話を前に書いた。4階建てとは大変なことだと考えていたのだが実はもっと大変らしい。

昨日、梅原猛教授の本を読み返していたら、日本語の起源についての論考があった。誤解を恐れず、勝手に自分なりに解釈すると、縄文人の元祖日本語の上に弥生人の渡来日本語が重なったということらしい。そうであれば縄文日本語が1階であり、弥生日本語が2階となる。弥生日本語が朝鮮半島から弥生人と共に渡ってきたことは、ほぼ定説として信じたい。そのもたらされた言葉が、古朝鮮語そのままだったのかどうかはわからないが、とにかく、縄文日本語と混血して「原日本語」が形づくられていったわけだ。

原日本語の言語アーキテクチャーはどの様に形づくられたかを私なりに考えてみる。

社会の構造が複雑なほど言語も発達しているとみれば、農業という生産方式をみにつけていた渡来人社会の方が縄文人社会よりは複雑であったろうから、言語体系は古朝鮮語のそれにとって代わったとみるのが素直であろう。縄文日本語は、単語のレベルで生き残った。

1階は縄文日本語、2階は弥生日本語。ここまでが、中国から漢語と漢字が入ってくるまでに、言語体系として一つの完成をみていた「原日本語」である。3階は中国からの漢語と、同時にこのときはじめて（多分）漢字という文字も輸入された。3階までは、おおよそ6世紀には完成した。

4階は幕末期からの西欧単語の輸入で建てられている。

哲学関連の抽象的概念、自然科学関係、技術関係、そして社会の仕組み関係などの数え切れないほどの単語がおよそ30年ほどの間に漢語に翻訳されて日本語の中に組み入れられた。漢字を使つての単語翻訳は、多分90%以上は、そこそ対応できたのではないか。中国文明がそのときから千年前に完成させていた文字と言葉で写し変えができたのだから、中国文明の発達の度合いが分かるというものである。

発音の話をおぼえていた。

原日本語の発音はどこからきたのだろうか。あいうえお、かきくけこ、とすべて母音がつく日本語の発音は、どうみても（どう聞いても？）ポリネシアが親戚とおもえる。しかし、南の海から丸木舟でわたってきた「ポリネシア日本人」の発音が、原日本語の発音の主導権をとったとはとても考えられない。そのように強い勢力ではなかったはずだ。発音の出所は結局謎である。

日本人にとって欧州言語のなかで、発音だけとりあげれば、スペイン語とイタリア語が習うのに最も易しい。何しろ、アイウエオ、カキクケコ、とはっきり発音すれば90%はOKになるから楽である。私も”お前のスペイン語の発音は素晴らしい”とほめられた経験が有る。外国語の発音でほめられたのは、後にも先にもこれ1回きりである。しかし、原日本語とラテン語がどこかで接点があったわけがないので、発音が似ているのは、たまたまの偶然であろう。

話がそれていったが、日本語の構造の話に戻すと、5階が「論理的表現」となる。

言い方を変えれば、この5階まで建てて、日本語は世界の中の日本語、文明としての日本語、あるいは、オープンジャパニーズとなりうる。

ものごとの関係のありようや考えを、論理的に明確に表現することによってのみ、文化を異にする世界の人々と話をするができるようになる。文化を異にしても、近代工業化社会のレベルがほぼ同じであれば、社会の仕組みから思想の表現まで、ほぼ共通の土台で理解しあえる。また、極めて大雑把に言えば、自然科学や技術は、初めから文化とは関係ない汎用性があるから、相手にことを理解できる頭脳さえあれば伝えることができる。

「臚（おぼろ）に霞む」ことを極意とする文化から、人工的に日本語を切り離し、世界に共通する事項を語るための日本語、すなわち、世界に開かれた日本語を構築しなければならない。

もともと、現実には、たとえばパテントという世界の共通分野で、技術という共通事項を記述するにおいても、「臚に霞ませて」いるのが、当たり前として通用している社会だから、オープンジャパニーズへの道は遠い。

(06. 3. 24. 篠原泰正)

(132) 動詞、あるいは真ん中と末尾

日本語はなぜ動詞が文章の末尾に置かれているのだろうか。答えが出ないまま考え続けている。

中国から言葉と文字が入ってきた5－6世紀の時点で、既に日本語の体系は出来上がっていたと考えられるから、このときにはもう動詞を末尾に置く表現スタイルが定着していたわけだ。

動詞を末尾に置くことで、主張が丸みを帯びて穏やかなものとなる。揉め事（もめごと）を嫌う日本文化のなかにしっくりと収まる方法と言える。このことは、反対側の視点からみれば、何を言っているのかよくわからない、曖昧な表現を助長している、となる。語尾（文章の末尾）をゴニョゴニョとぼかしても、そこまでの課程で表現された名詞（主に漢語）のお陰で、大体の意味は伝えられる。おおよそのところで理解し合えることになる。また、長いセンテンスの場合は、末尾の動詞に至るまでに受け取り手が疲れてしまい、肝心のイエス、ノーを聞き漏らしてしまう、読み落としてしまうことになるかもしれぬ。

一方、英語をはじめ、欧州言語は文章の真ん中に置かれた動詞が軸になる。動

詞が中央制御装置 (Central Processor) であり、一つの文章で表現されるべき内容はここで制御されている。より具体的にいえば、主題 (Subject Matter) が何であるのか、何をしているのか、他者に何を働きかけているのかがここで定められる。従って、受け取り手は、ここままで、その文章の全体像の骨格を把握できる仕組みになっている。

このように見ると、欧州言語は動詞が説明の主体である言語であり、日本語は名詞で説明する言語と区別することも可能だろう。このことは、文化を基盤に置いた言語の特性で有るから、どちらが良いの悪いのと判定を出す対象とはならない。しかし、物事を明確に、確実に相手に伝える道具としては、欧州言語の方が勝っているといえる。少なくとも私はそう判断している。反して、日本語は、連綿と心情を述べる時などには、きわめてふさわしい言語と言えるかもしれない。

小学生、中学生の作文において、例えば過日行われた遠足について書くという場合、その大半は、楽しかったとかの心情と、何々が綺麗だった、とかの自分の印象の記述で占められる。言った先の場所がどの様であり、そこで何が生じたかというような、事実描写のレポートはここではみられない。そのように書くことを指導されていないのだから、当然の結果である。

自分の目の前の事物を言語でできるだけ正確に、くわしく描写し、他者に伝える訓練をわれわれは小学生のときから社会人になるまで、一度も受けずに来ている。動詞が末尾にくる言語は事実描写には向いていないと考えられる上に、その弱点を克服すべき訓練も受けていないわけだ。そもそも、事実描写に不向きな言語であるとの認識さえ、日本人の間でほとんど定着していないのではないか。認識されていなければ、当然、改善策が考え出されるはずもない。

言語による描写が不得意なため、われわれは、代替策として、絵に頼ることになる。いにしえ (古) の絵巻物から現代の漫画までその伝統はつづいており、写真や映像が大好きなのもこの流れの中で意味付けできるだろう。

と、ここまで書いてきたが、それならば、あの平家物語の描写は何か、絵が一つもないのに、屋島における那須の与一の扇の的の話などは、あたかも現場にいたようにその情景が眼に浮かぶではないか。あの描写力、あの語りの力は何なのか。日本語で、正確に記述できるではないか。しかも美しく記述できるではないか。

日本語を考えるときに、あの平家物語の「語り」は研究対象の第一番に挙げられるべき遺産であろう。私自身の課題として、とりあえず記しておく。

(06. 3. 31. 篠原泰正)

(133) 欧米の文書、あるいは主張を通すために

欧米社会で生産される文書、私が知っている範囲で言えば、アメリカ社会で生産される文書の完成度とその量(1件あたりのページ数)には、いつも圧倒される。

文書、例えば政府の戦略書、調査委員会の報告書、企業の年次報告書、製品の説明マニュアル、特許仕様書などを作成する情熱とその技巧は、とてもわれわれが真似できるものではない。その背景記述からなにかから、実に分かりやすく丁寧に書かれている。

彼らはなぜに、あれほどまでリキ(力)を入れて丁寧に一つの文書を構築するのだろうか。いろいろな原因が考えられるが、その一番の理由は、「自分の主張」を通すためだろう。そう見れば、あの行届いた書き方は、親切心から出たものではないことがわかる。自分の主張を通すために、受け取り手であるあなたの理解を得て、自分の味方になってもらうために、とことん書いているわけだ。

自分の主張を際立たせるためには、他者が何をやってきたかを丁寧に記し、その違いをはっきり言う必要がある。だから、他者の業績を尊重して、あれもこれも参照(references)を挙げているわけではない。

自分の主張が通るか通らないかが、自分の存在が承認されるか否定されるかに直につながっている過酷な社会においては、報告書一つを出すにも、仕様書一つまとめるにしても、いささか大げさに言えば、命が掛かっている。

翻ってわが日本を眺めれば、文書は本命事項のつけたしの域を未だにでていない。主張をあからさまに述べることは、はしたない行いであるという心が底流に流れているから、あるいは、あからさまに述べると自分が「村八分」になりかねないので、どうしても控えめになってしまう。結果として何が述べられているのかよくわからない文書になってしまうことが多い。

このまま放っておくしかないのだろうか。

もちろんいいわけがない。曖昧な文書は国際社会では通用しないのだから、文書は明快に書かなければならない。そのとき、欧米流に、主張を通すために明快に書けというのは、われわれには無理であり、またまねする必要もない。

われわれは、その文化の基底にある他者への優しさをベースにして、他者に明確に理解してもらうために、つまり親切心をもって、文書を明快に作成することを心がけるべきだろう。

親切な心、他者への気配りを基盤において文書を作成すれば、それは必然的に分かり易いものとなり、結果として、主張を通すために念入りに仕立て挙げられた欧米の文書と肩を並べることができるようになるだろう。

そう信じたい。

(06. 4. 2. 篠原泰正)